

発達 247

子どもは感情表出を制御できるか

- 幼児期における展示ルール (display rule) の発達 -

内田 伸子

(お茶の水女子大学文教育学部)

【問題】他人の感情を推測して自分自身の感情の表出や行動を制御することは、第1に、怒られたり、笑われたりすることから自分を守り、第2に、相手の気持ちを傷つけないようにするために不可欠となる。本研究では、相手の心的状態を考慮して自分の感情の表出を制御することがいつ頃から可能になるかについて取り上げる。展示ルール (display rule) の使用には発達差や性差が認められ、年齢が高くなるほど上手に使えるようになることが見いだされている (Saarni, 1984)。また3, 4歳児でも、展示ルールを (意図的にはないが) 運用しており、実験者の前では、あからさまな感情表出を隠そうとする傾向がある (Cole, 1986)。登場人物の感情と表現がくい違う状況では、4歳児はその食い違いが理解できないが、6歳児は理解できるようになる (Harris, et al., 1986)。3, 4歳児はまだ感情と見かけの感情の区別ができないが、6歳頃までには感情と表現 (見かけの感情) の区別ができるようになる。感情が見かけと同じではないことについての理解の発達については日英米間に差はなく、認知能力と関連しているが、ルールの運用については、日本の子どもが英米に比べて早い傾向がある (Gardner, et al., 1988; Harris, et al., 1989; Harris, 1989; Saarni, 1989)。感情と見かけの感情を区別するためには“だます”という心的過程に含まれる recursive thinking が発達しなくてはならない (Harris, & Gross, 1989)。

以上からは、展示ルールの意図的な運用には認知能力の要因が関係していることが示唆されるが、特に、自分の感情の表出が社会的にどう解釈されるかを予測したり、相手が何を意図しているかをモニターすることができるか否かが展示ルールの制御をするための前提になるものと推測される。物語やごっこ遊びの筋の一貫性をモニターしたり、結末を考慮して筋をプランすることは5歳後半過ぎであり、モニタリング能力やプランニング能力の発現は、言語技能への習熟と情報処理能力自体の拡大によって保証されることが示唆されている (内田, 1990)。これらを踏まえると、相手の感情や意図を推測したり、理解することはかなり早くから可能だが、相手の感情や意図を考慮して、自分自身の感情の表出を感情の表出を意図的に制御するようになるのは、5歳後半すぎであると予測される。第1にこの予測を確かめること、第2に、実験事態をメタ的に認識することも5歳後半すぎから可能になるとの予測を確かめることを目的とする。

【方法】【実験計画】条件 (不一致・一致・<予測>) × 年齢 (4歳後半・5歳前半・5歳後半・6歳前半) × 事態 (実験事態・日常) の3要因計画。第1、第2要因は群間要因、第3

要因は群内要因である。

【被験者】4歳児クラス・5歳児クラスから12条件に各10名ずつ計120名、男女半々、月齢、WPPSIの「文章」評価点を基準にして割り当てた。

【材料】「ケーキ」「ブーツ」「クリ」の3課題。

【手続き】短い物語を読みあげ、登場人物の行為について回答させ、行為の理由づけを求める。不一致・一致群では、①メモリーチェック (主人公の状態とその理由)、②主人公がとった行動の理由づけ・副主人公の気持ちと理由づけ (3課題)、③日常被験者はどうするか (嫌いな食べ物・嫌いなプレゼント) →隣室 (別の実験者) へ移動; ④実験場面をどうとらえているか + 呈示された物語の再生の4課題の順に実施する。予測群では、子どもの自発的反応を調べるため、②で登場人物の行為を予測させ→予測と矛盾とする行為を実験者が呈示して、その行為をとった理由づけを求める。

【評価基準】行為の理由づけを次の3水準に分類し、水準1を3点、水準2を2点、水準3を1点として得点化した。

水準1: 自分の感情をありのまま出したときの相手の気持ちの推測を媒介にして自分自身の表現を決定する。

水準2: 「スクリプト的」判断 (大人がくれたものは嫌いでももらう)。

水準3: 自分の欲求中心に感情を表出する。

【結果と考察】I. 絵カード課題: (1)主人公の行為の理由づけ; ①主人公の行為の理由づけの得点 (表1・左欄) について、2要因の分散分析を行なうと、条件の主効果と年齢の主効果が1%水準で有意であり、条件×年齢の交互作用が5%水準で有意となった。Tukey法により対間比較を行なうと、一致群では年齢差は有意ではなく、不一致群のみ6歳前半=5歳後半>5歳前半=4歳後半の間が有意であった。これは感情と一致した行為の理由づけは容易で4歳前半児も可能だが、感情とくいちがう表現の理由づけは難しく、5歳後半から6歳前半にかけて可能になることが示唆された。

主人公の行為の理由づけのを水準別に見ると (図1)、一致群では水準3の自己感情に基づく反応頻度が高く、不一致群では水準2の状況を考慮した反応頻度が多くなる。また、水準1の祖母感情を考慮に入れた反応、つまり、自分の感情を隠すことによって祖母を傷つけないことという理由づけは不一致群において、また5歳後半から観察されるようになることが示唆された。また、一致群に比べて不一致群の成績が高くなることから、感情と行為が一致しないときに他者の心の存在あるいは自分の行為が相手にどのような影響を及ぼすかに気づき

易くなり、祖母の感情を考慮に入れた行為の制御が可能になることが示唆された。

②予測群の理由づけ (=自発的反應) の分析結果; 予測群では、嫌いなものでももらうという YES 反応が 4、5 歳児とも多く、30 反応中 4 歳児 20 反応、5 歳児 26 反応が観察された。しかし、理由づけの水準では年齢差が顕著で、4 歳児は、第 3 水準と第 2 水準による理由づけが殆どであるが、5 歳児は第 1 水準に分類される理由づけが殆どであった。また NO (YES) 反応をした被験者に対して、実際は登場人物は YES 反応をしたという、子どもの判断と矛盾する情報を与えて、どうして主人公は YES (NO) 反応をしたのかについての理由づけを問うと、4 歳児は、第 3 水準と第 2 水準による反応が相半ばしたが、5 歳児は第 2 水準が 1 個見られただけで、あとは全員第 1 水準の理由づけを行なった。

(2)祖母の感情の理由づけ; 祖母の感情の理由づけについて得点化した(表 1・右欄)。条件の主効果と年齢の主効果が 1% 水準で有意であり、条件×年齢の交互作用は有意ではなかった。一致群(嫌いなので拒否)が得点が高い。また、対間比較を行なうと、一致群では 6 歳前半 = 5 歳後半 > 4 歳前半の間が、また、不一致群では 6 歳前半 > 4 歳前半の間が各々有意であった。一致群が得点が高いのは、この群では祖母の悲しい気持ちが顕著になるためか、「おばあちゃんがせっかく買ってあげてくれたのに、もらってあげなかったから、おばあちゃんは悲しい気持ちになると思う」(Y.G. 5 歳 7 カ月) というように、感情移入した水準の高い答え方が多く観察されたのに対して、不一致群では「くつをもらったから嬉しい」とスクリプト的回答にな

表 1. 理由づけの得点の平均 (SD)

年齢\条件	[主人公の行為]		[祖母の感情]	
	不一致	一致	不一致	一致
6 歳前半	M 6.9 (SD) (1.4)	3.2 (0.4)	6.3 (1.3)	7.6 (1.7)
5 歳後半	M 5.7 (SD) (1.8)	3.2 (0.4)	6.0 (0.8)	7.2 (1.3)
5 歳前半	M 3.6 (SD) (0.9)	2.7 (0.6)	5.3 (1.4)	5.8 (2.5)
4 歳後半	M 4.4 (SD) (2.2)	2.9 (0.3)	4.2 (2.6)	5.5 (2.4)

表 2. 予測群の YES 反応の頻度と理由づけの水準 (30 反応中)

年齢群	水準 1 頻度 (%)	水準 2 頻度 (%)	水準 3 頻度 (%)	計 頻度 (%)
5 歳児	21(70.0)	1(3.3)	4(13.3)	26(86.7)
4 歳児	2(20.0)	11(36.7)	7(13.3)	20(66.7)

* 水準 1: 祖母が可愛そう・2; お腹が空いたから・3; 本当は好き

表 3. 絵カードの回答と日常の自分の態度との比較 (MAX.=6)

事態\条件	5 歳児			4 歳児		
	不一致	一致	予測	不一致	一致	予測
主人公	M 4.2 (SD) (1.2)	2.2 (0.5)	3.5 (1.1)	3.0 (1.2)	1.9 (0.4)	2.7 (0.9)
自分	M 3.2 (SD) (1.0)	3.4 (1.2)	3.0 (1.2)	2.7 (1.0)	2.5 (1.1)	2.9 (1.1)

る傾向のためと思われる。

以上、(1)①主人公の行為の理由づけと(2)祖母の感情の推測の反応を総合すると、自分のとった行為が相手をどのような気持ちにさせるかを考慮して、感情の表出を制御することは、幼児期後期(特に 5 歳後半~6 歳)にならないと不可能であるとの仮説は概ね支持された。また、(1)②予測群の反応(表 2)からは、5 歳児は自発的に相手の心的状態を考慮して自分のとるべき行為を決めようとすることが示唆されたことは仮説の傍証となる。

II. 実験事態と日常の比較: 実験事態(「クリ」「ブーツ」)

での回答と子どもが「嫌いな食べ物を出されたとき」「嫌いなプレゼントももらったとき」どうするかについての記憶に基づく反応を比較すると(表 3)年齢の主効果のみ有意であり、事態の主効果は有意ではなかった。

III. 実験者の意図の推測: 表 4 に示したように、5 歳後半過ぎになると、大人(実験者)の意図を推測し、その意図に合わせた行動がどのようなものかを正しく言い当てられる子どもが増えてくるのがわかる。このことは仮説の傍証となる。

【結論】以上の実験を通じて、仮説は検証された。展示ルールは、まず最初は「大人がくれたらもらう」というように、手続的・スクリプト的に使われ、次の段階で、相手の感情や意図を考慮して自覚的に運用されるようになる。この時期はプランやモニタリング能力が出現して、相手の感情や意図の推測をメタ的に捉えられる 5 歳後半以後であることが確認された。

【付記】本研究は文部省科学研究費一般研究 (B) 「感情」の基礎メカニズムの検討(研究代表: 藤永保)の補助を受けた。

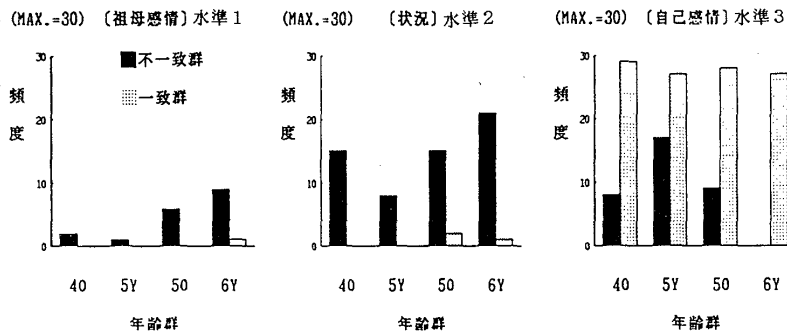


図 1. 主人公の行為の理由づけの水準毎の反応頻度

表 4. 大人(実験者)の意図をどれくらい把握しているか (30 反応中)

年齢群	大人の意図の推測				大人が喜ぶ行動の推測				意図と行動の答えの不一致
	A	B	C	D	A	B	C	D	
6 歳前半	18	7	5	0	19	7	3	1	2
5 歳後半	15	7	8	0	14	5	8	2	6
5 歳前半	5	7	17	1	7	6	11	6	8
4 歳後半	6	9	13	2	6	5	15	4	10

水準 A: 勉強(問題)をやらせて答えさせたい。やさしい気持ちにならせたい。
 水準 B: お話を聞かせたい。紙芝居を見せたい。いっしょに話したい。
 水準 C: わからない。
 水準 D: プレゼント(お花)をあげたら。静か(いい子)にしていたら。